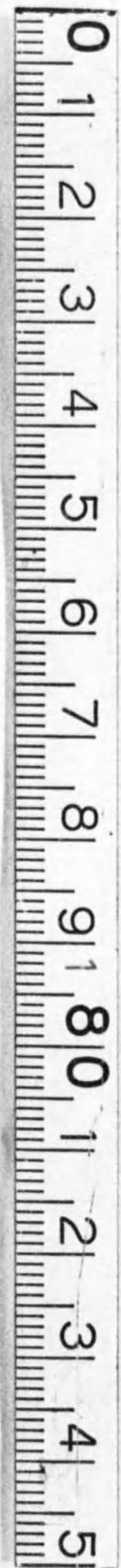


西行櫻

昭和改訂版
内十五

特258

368



始



西行櫻



〔梗概〕 西行法師洛西に庵を結びて住みけるに、百千鳥囀る春の頃、其庭前の花を見んとて都の人々集ひ來り、閑居の妨げとなるより西行厭はしく「花見んと群れつと人の來るのみぞあたら櫻のとがにはありける」と詠みぬ、其夜夢中に白髮の老人忽然として現れ、今の詠歌の心を猶も尋ねたと、櫻のとがとは何やらん、浮世と見るも山と見るも、唯其人の心あり、非情無心の草木の花にとがは有らトと言ふ。西行理りにおもひ、御身は花木の精かと尋ぬれば、げにも然なり花にとが無き謂れを申し開きに來れるなりとて、西行との知遇を喜び、都名所の花の數々をつらねて興じたる上、春の夜の一時を千金の値有りと惜み、老の足を踏みめつゝ舞を舞ひ、夜の明けゆくまゝ姿は消え失せぬと見て夢は覺めにけり。

庭を乃も今を成由中は猶も回一

人の友を誼ひ誰今馬らの葉をいよるは

^{立衆上} 百子鳥囀るまゝに物よおす〜あしたまり

ゆく日敷くはとも海をたかたなれやをよ

とほつそを乃友をともさぬも押さして

誰もをもさるゝと〜^{一連ノ} 庭を乃も

いふありの庭をよとさくひ中と葉

肉を中さうしはほひてい ^{つまじ} ちみきひ ^{シガク}

^{サシ上} ^{わか} 夫まはるは上米を其の梢よりこれ

秋の月ハ下化冥暗乃あよをどる 誰り

志は乃水小三伏は夏もたなく ^{カニ} 洞庭乃 ^{テイ}

志の風一あらは秋を催まきり人留万事

をのづらゝ見ケ化ン妙ツ法メ乃シ結ケ縁チこり、志詞

あぐゝ四乃ツ時シ亦もク猪シまキこスるハ花ハ實ム也

おシなル一ハあハ画ハ乃シ兼セ一ハたカのシカク

凡詞洛陽の花ハ登クこシいハてシひハるハあグゝハ花

わぐ、尾ハをシ世ハもク隨ハ筆ハ画ハのシ出ク梅ハ花ハもク

来ハ我ハもク楚ハつハいハるハ物ハをシ去クぬグゝハ山

遠ハきハ花ハ見ハよクりハあハつハたル志ハをシしクゝハ

んハせハぞハいハあハぐハきハあハのシ葉ハ増ハせハ戸ハをシひハ

こハ肉ハへシ事ハをシせハ様ハをシたカんハきハをシあハらシ

あハんハのハしハ乃シるハひハをシあハらシいハあハらシ

のハ花ハよクいハまハれハいハ永ハあハらシ又ハんハよハなるハもの

花ハ小ハ花ハをシ花ハ葉ハをシ転ハしハつハおハりハ心ハ浅

花の影に新五元の貴族解集乃らういふん
 の花も休りてよそ 昔れまゝにける有様
 かくれ所のはまじりど あまはまじりも乃都
 ちの事ナに上回 控人も花よの何ぢかくれ家乃
 歩 かくれ所の影の奥なれはまじりにままま
 一可ヤラまじり影むせむらにたまる物をいふ

控てよみは世の命ホカにまもあまじり
 終乃極スガあまじり 画あまいは山陰のむ
 見えぬまのこたる花い 控へたるまもあまじり
 花の影に新スガの貴族解集乃らういふん
 花の影に新スガの貴族解集乃らういふん
 乃友人まじり一命の命をいふ 花の影に新スガの貴族解集乃らういふん

むきつゝ人のくるせこそあはく様乃せり
よみける 月 あり様乃陰き月よる
るあは本の女は家話忘れし諸世も今
あきも乃下敷し志てあは世は眺めさん
埋本の人志まぬ女のゆゑも心乃む
あきけるぞや 花見よむむれつゝ人のく

るのこそあたし様の科中あきけり
あき ありきやむ花乃夕陰おそひてまどろ
あき ありやむ花乃夕陰おそひてまどろ
あき ありやむ花乃夕陰おそひてまどろ
あき ありやむ花乃夕陰おそひてまどろ
あき ありやむ花乃夕陰おそひてまどろ
あき ありやむ花乃夕陰おそひてまどろ
あき ありやむ花乃夕陰おそひてまどろ
あき ありやむ花乃夕陰おそひてまどろ
あき ありやむ花乃夕陰おそひてまどろ
あき ありやむ花乃夕陰おそひてまどろ

あき

あき

り今の詠あり心を悦ばしめんと為る歌
まじりわき上未まそもや夢中の夢といゆめに
なれる人來べし一まよひきつて只今の詠
あり心を悦ばしめんと為るのあやうし
我も上人の法ありやうふ事乃ありきなり
まはむ事いじん人の心こそあたらし様は

科しよよ有有する詞扱扱乃科も何ならん
しか是わきに只ま浮世をいふはまむもま
結結群群集集れしまくく一一ををさし一詠詠する也
なな浮世をいふはまむもま
心心あり心は情を心は草木の心は浮世
乃科乃あり乃一一ああはあれれのの心心はは浮世なり

ねころろ極よ理をたふに^上は^上なりい^上く極を^上本
の^上精^上り^上 識^上は^上花^上の^上精^上なる^上が^上は^上身^上も^上せ^上ふ
を^上本^上は^上極^上の^上 ^{わか}花^上抽^上い^上を^上ぬ^上草^上本^上を^上た^上れ^上せ
^{して}科^上を^上き^上謂^上を^上夕^上花^上乃^上 ^{わか}科^上を^上 ^{して}う^上こ
く^上に^上なる^上里^上 ^{同上}死^上し^上や^上老^上本^上の^上花^上も^上き^上く^上な
く^上枝^上朽^上く^上あ^上こ^上ろ^上極^上乃^上科^上は^上を^上き^上よ^上い^上を^上

極

七

中^上ひ^上く^上花^上乃^上精^上ま^上て^上は^上る^上り^上ん^上を^上た^上草^上
本^上も^上花^上実^上は^上折^上ら^上れ^上ぬ^上や^上草^上本^上國^上土^上と^上
成^上仏^上は^上法^上法^上成^上べ^上い^上 有^上難^上や^上上^上人^上の^上
以^上徳^上運^上よ^上ひ^上り^上き^上く^上あ^上ら^上は^上極^上あ^上ま^上祿^上く^上
花^上極^上あ^上ら^上ぬ^上く^上あ^上ら^上未^上だ^上を^上多^上林^上下^上に^上
啼^上く^上涙^上つ^上き^上が^上こ^上い^上 ^上史^上叙^上よ^上あ^上も^上を^上

花^上乃^上精^上

科^上を^上き^上

上^上史^上叙^上

詩でお伴つくりて 夕よの飛鳥に海
川を 一時も海を 九重にさき世を
乃八重橋 幾世乃まをまぬらん
結るよ花の名言き六 先初世を急ぐ
なほ 近衛殿の糸梅 見渡せば柳
梅をまきまきせきく 朝の雲の錦 燦爛と

里子本此梅を桂墨を色を前の名よん
まゐる子本の花盛を海やちよみある院
異沙つを此を感四五天の棠ももさふ
まいうきく獲るべきよ上なる思合下河原
昔通照僧正の 浮世を感ひ一花頂
山 龍宮の源山此花乃ち枯ふし 龍乃

林を思ひまじく暮る夜あり清水香乃
地まじく松吹風の音羽山家又嵐山
戸を深き落る浪津波を地も大井
川井樋子雪やうく流るん 谷合せりや敷
そふ時乃敷 後夜の時此香をきそ
我ふ あく名残惜乃夜おや那惜む

庭へく侍難き六時逢ぐりたひ友成
へい 暮宵一刻体千金をよ清香月
小陰 暮乃夜暮 暮此夜の花乃陰
よ里の助て 指子 清夜をよ海にぬ別き一花
あま 別き一うあれ別き一そあま
まよてまよて 一夜のまよてまよて

380
179

同上...
 志しむい花乃陰をり世を... 余は...
 小倉の山陰よみは夜橋の花此枕の夢
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

昭和十三年一月廿五日印刷
昭和十三年一月三十日發行

定價金五拾錢

著者版權所有

作者 寶生新
 東京市下谷區上野櫻木町四十八番地
 發行兼印刷者 江島伊兵衛
 發行所 下掛寶生流謠本刊行會

終

